



## 縁起の法

これ(原因)があるから、かれ(結果)がある。これが生じるときに、かれが生じる。これがなければ、かれはない。これが滅すれば、かれも滅する。

すなわち、無明<sup>むみょう</sup>によって行<sup>ぎょう</sup>(意志作用)が生じる。行によって識<sup>しき</sup>(認識作用)が生じる。識によって名色<sup>みやうしき</sup>(精神的要素と物質的要素)が生じる。名色によって六処<sup>ろくしょ</sup>(眼・耳・鼻・舌・身・意の六つの感覚器官)が生じる。六処によって触<sup>しよく</sup>(感覚)が生じる。触によって受<sup>じゆ</sup>(感覚作用)が生じる。受によって愛<sup>あい</sup>(渴望)が生じる。愛によって取<sup>しゆ</sup>(執着)が生じる。取によって有<sup>ゆう</sup>(存在)が生じる。有によって生<sup>しやう</sup>(誕生)が生じる。生によって老い・死・嘆き<sup>なげ</sup>・悲しみ・苦しみ・憂い<sup>うれ</sup>・悩みが生じる。

このようにして、一切の苦の集まりが生起する。

しかし、無明を離れてことごとく滅すると、行が滅する。行が滅すると識が滅する。識が滅すると名色が滅する。名色が滅すると六処が滅する。六処が滅すると触が滅する。触が滅すると受が滅する。受が滅すると愛が滅する。愛が滅すると取が滅する。取が滅すると有が滅する。有が滅すると生が滅する。生が滅すると老い・死・嘆き・悲しみ・苦しみ・憂い・悩みが滅する。

このようにして、一切の苦の集まりが滅する。

(『大蔵経[中部]』より)

いかなるものも必ずほかのものに縁<sup>えん</sup>って成立<sup>ていりつ</sup>するという縁起<sup>えんぎ</sup>の法を知らないこと(無明)によって、苦は生じる。つまり、縁起を知ることで無明を脱<sup>だつ</sup>すれば、苦も滅するのである。このことを示したのが、無明から老・死までの因果<sup>いんぐわ</sup>関係を示したこの十二縁起(十二因縁、十二支縁起)の教えである。

[次ページへつづく]

vol.  
05

## 思考問題セクション 倫理

問題編

→教科書 p.60

次の資料は、ブッダが説いたとされる言葉である。この資料で述べられている内容と同じ趣旨にあたると考えられる、ブッダが説いたとされる言葉を、後の①～④のうちから一つ選べ。

## 資料

この世の禍福いずれにも執着することなく、憂いなく、汚れなく、清らかな人。そのような人を私は「バラモン」とよぶ。……

生まれによって「バラモン」となるのではない。生まれによって「バラモンならざる者」となるのでもない。行為によって「バラモン」となるのである。行為によって「バラモンならざる者」となるのである。

行為によって農夫となるのである。行為によって職人となるのである。行為によって商人となるのである。行為によって雇人かひいんとなるのである。

(『スッタニパータ(諸経要集)』より)

- ① 生まれを問うことなかれ。行いを問え。火は実にあらゆる薪から生ずる。賤しい家に生まれた人でも、聖者として道心堅固であり、恥を知って慎むならば、高貴な人となる。
- ② 私たちは夢の中で食べ物、飲み物、衣服、毒、武器などを見ることがあるが、それらは食べ物などの効用を実際に果たしはしない。けれども、夢の中でなければ(目覚めているとき認識されるものは)その効用を果たさないわけではない。
- ③ 行為の結果に対する執着を捨て、常に心が満ち足り、他に依存しない者は、たとえ行為に携わっていても、何ら行為を行わない。
- ④ この世においてその行いの好ましい人々は、好ましい母胎に、すなわちバラモン(司祭者)の母胎か、クシャトリア(王侯、武人)の母胎か、ヴァイシャ(庶民)の母胎に入ると期待される。しかし、この世においてその素行の汚らわしい人々は、汚らわしい母胎に、すなわち、犬の母胎か、豚の母胎か、シュードラ(隷属民)の母胎に入ると予想される。



## 般若心経（部分）

観自在菩薩。行深般若波羅蜜多時。照見五蘊皆空。度一切苦厄。

舍利子。色不異空。空不異色。色即是空。空即是色。受想行識。亦復如是。

舍利子。是諸法空相。不生不滅。不垢不淨。不增不減。

〔現代語訳〕観音菩薩が智慧の完成のための深い行にはいついたとき、色・受・想・行・識の五蘊はみな空であるとその本質を見きわめ、一切の苦からのがれることができた。

シャーリプトラよ、色は空に異ならず、空は色に異なる。色はすなわち空であり、空はすなわち色である。受・想・行・識も、色と同じくまた空である。

シャーリプトラよ、すべてのものは空であって、生じることも滅することもなく、穢れることも清浄になることもなく、増えることも減ることもない。

-----  
仏教の経典の中で最も短いものの一つである『般若心経』には、大乗仏教の教えの要点である空の思想が簡潔に示されている。

ホームへ

書名入る

第1編第2章 さまざまな人生観・倫理観・世界観 I

1節 哲学すること >

2節 ギリシャの思想 >

3節 宗教と社会 >

4節 ユダヤ教とキリスト教 >

5節 イスラーム >

6節 古代インドの思想と仏教 >

7節 中国の思想

8節 芸術 >

読名入る > 第1編第2章 さまざまな人生観・倫理観・世界観 I

67ページ 読み上げ音声21 (p.67~69) →別紙 3-1

67ページ デジタル原典資料 (第1編第2章7節1) →別紙 11-1

67ページ デジタル現代語訳 (第1編第2章7節1) →別紙 11-2

70ページ 読み上げ音声22 (p.70~72) →別紙 3-1

70ページ デジタル原典資料 (第1編第2章7節2) →別紙 11-3

70ページ デジタル現代語訳 (第1編第2章7節2) →別紙 11-4

73ページ 読み上げ音声23 (p.73~74) →別紙 3-1

73ページ デジタル原典資料 (第1編第2章7節3) →別紙 11-5

73ページ デジタル現代語訳 (第1編第2章7節3) →別紙 11-6

73ページ 思考問題セレクション 倫理 vol.6 →別紙 11-7



## デジタル原典資料

第1編 | 第2章 | 7節 | 1 孔子と儒家の思想

→教科書 p.67

## 忠恕

子曰く、参や、吾が道は一以て之を貫く。曾子曰く、唯。子出づ。門人問ひて曰く、何の謂ひぞや。曾子曰く、夫子の道は、忠恕のみ。

〔現代語訳〕先生がおっしゃった。「参(曾子)よ。私の道は、ただ一つのことでもってつらぬかれている」と。曾子は言った。「わかりました」と。先生が出ていかれた。門人が曾子に尋ねた。「(先生の言われたことは)どのような意味ですか」と。曾子は答えた。「先生の道は忠恕だけということだ」と。

(『論語』より)

## 克己復礼

顔淵仁を問ふ。子曰く、己に克ちて礼に復るを仁と為す、一日己に克ちて礼に復れば、天下仁に帰す。仁を為すは己に由る、而して人に由らんや。顔淵曰く、請ふ其の目を問はん。子曰く、礼に非ざれば視ること勿かれ。礼に非ざれば聴くこと勿かれ。礼に非ざれば言ふこと勿かれ。礼に非ざれば動くこと勿かれ。顔淵曰く、回不敏なりと雖も、請ふ斯の語を事とせん。

〔現代語訳〕顔淵(顔回)が仁について質問した。先生はおっしゃった。「自己に打ち勝って礼に立ち返ることを仁という。(為政者が)一日でも自己に打ち勝って礼に立ち返ることができれば、天下はその人の仁の徳にしたがうだろう。仁をなすかどうかは自己にかかっている。ほかの人によることではないのである」と。顔淵は言った。「では、実践するための要点を尋ねさせてください」と。先生はおっしゃった。「礼にかなっていなければ見てはならない。礼にかなっていなければ聞いてはならない。礼にかなっていなければ言ってはならない。礼にかなっていなければ動いてはならない」と。顔淵は言った。「回は聡明ではありませんが、このことばを努めおこなっていきます」と。(『論語』より)

孔子と門人たちの言行録である『論語』には、孔子のさまざまな教えが残されている。孔子の考えの基本にあるのは、人が踏みおこなうべき道を知ることであり、心のもち方である仁と、仁が外にあらわれた礼が最も重要なものとして説かれる。礼は形式だけでは不十分で、仁の徳がその根本になければならない。仁は孝・悌や忠・恕などとして示されるものであるが、それらの徳にもとづいておこなわれる徳治主義こそが政治のあるべきあり方だと、孔子は考えたのである。



## 2 孔子のことば

- ・知っていることを知っているとし、知らないことは知らないとすることが、本当の知るということである。
- ・過ちを犯すのは仕方がないことで、過ったときにそれを改めないことが本当の過ちである。
- ・口できれいごとをならべ、表情をとりつくろっているような人は、仁が欠けている者である。
- ・徳によって政治を行えば、北極星がいるべき場所にいて輝き、ほかの星々が整然とそれに向いて動いているように、人々は為政者についていくであろう。
- ・自分自身が正しくあれば、命令せずとも人々は行動し、自分自身が正しくなければ、命令しても人々はしたがわないものである。
- ・過去をたどってよく学び、そこから今後の新しい考えや方法を知ることができれば、人の師となるにふさわしい。
- ・学んでも自分で考えなければ真理はわからず、自分で考えるだけで学ばなければ独断になってしまう危険がある。
- ・私は十五歳で学ぶことを志した。三十歳で一人で立つことができた。四十歳で迷うことがなくなった。五十歳で天に与えられた使命を知った。六十歳で人の話を素直に聞けるようになった。七十歳で思うままにふるまっても規範を踏み外さないようになった。  
(『論語』より)

## 4 非攻

一人を殺せば、これを不義ふぎといって、必ず死罪となる。この考えでいけば、十人を殺せば、不義は十倍となり、必ず十の死罪ということになる。百人を殺せば、不義は百倍となり、必ず百の死罪ということになる。このようなことを天下の君子はみな知っており、人を殺すことはまちがっている(非)とし、不義であるという。しかし、大いに不義をなして国を攻めるにいたっては、これを非とすることを知らず、これをほめて義であるという。まことにそれが不義であることを知らないのである。(『墨子』より)



## デジタル原典資料

第1編 | 第2章 | 7節 2 儒教の展開

→教科書 p.70

## 大丈夫

天下の広居おに居り、天下の正位たいどうに立ち、天下の大道こうろを行ふ。志を得れば民と之これに由り、志を得ざれば独り其その道を行ふ。富貴ふうきも淫いんする能あたはず、貧賤ひんせんも移うつふる能いはず、威武いぶも屈くつする能こはず。此これを之これれ大丈夫だいじゆうふと謂いふ。

〔現代語訳〕(仁にという)天下の広い住居じゆうにおり、(礼れいという)天下の正しい位置ちゐに立ち、(義ぎという)天下の大道だうどうをおこない、志を達成して地位ちゐを得れば民とこの正しい道みちを生き、志がかなわなければ一人でこの正しい道みちを生き、どのような富とみや高い地位ちゐにも誘惑いごされず、どれだけ貧乏ひんぱんで低い地位ちゐにあってもその志こころを曲まげず、どのような権威けんゐや武力ぶりくもその志こころを曲まげさせることはできない——このような人を大丈夫だいじゆうふという。  
(『孟子』より)

孟子は、仁・義・礼・智の四徳しとくを備え、浩然こうぜんの気があふれた理想的人物りてきを大丈夫だいじゆうふとよんだ。

## 王道政治

孟子りゆう梁けいおうの恵王まみに見ゆ、王いわ曰く、叟おきな、千里を遠とほしとせずして来きる、亦また将まさに以もつて吾わが国を利きする有あるらんとするか。孟子こた対たいへて曰く、王何ぞ必ずしも利きと日ひん。亦また仁義有あるのみ。

〔現代語訳〕孟子りゆうが梁けいおうの恵王まみに拝謁はいえつした。恵王は言った。「老先生らうせんせいは千里を遠とほいということなく、いらしてくださいました。わが国に利益りやくをもたらしてくださるのでしょうか」と。孟子こたは答こたえた。「王わはなぜ利益りやくのことばかりをおっしゃるのですか。王わは仁義にぎだけを考えていらっしゃればよろしいのです」と。  
(『孟子』より)

孟子は、利益りやくではなく、仁義にぎを考える王道政治わうどうせいを求めた。

[次ページへつづく]



## 1 四端の心

惻隱そくいんの心をもたない者は、人ではない。羞惡しゅうおの心をもたない者は、人ではない。辞讓じじょうの心をもたない者は、人ではない。是非ぜひの心をもたない者は、人ではない。惻隱の心は、仁じんの端緒たんしよである。羞惡の心は、義ぎの端緒である。辞讓の心は、礼れいの端緒である。是非の心は、智ちの端緒である。人がこのような四端したんの心を備えているのは、ちょうど、人が四肢ししを備えているようなものである。(『孟子』より)

## 3 性悪説

人の本性は悪であり、それが善であるのは、人為じんい的につくられたものである。人の本性は、生まれながらに利益を好む。これにしたがってしまうと、ほかの人と争い奪うばいあうことになり、辞讓の心が滅ほろんでしまう。また、生まれながらにほかの人をねたみ憎にくんでしまう。これにしたがってしまうと、人を痛めつけ、忠・信の心が滅んでしまう。(『荀子』より)

## 4 格物致知

その根本を深く探ろうとするならば、物にいたってその知きわを究めるしかない。物にいたるとは理りをきわめるという意味である。おそらくある物があれば必ずその物の理がある。しかし、理は形がなくて知るのがむずかしく、物は形があるので観察しやすい。だから、ある物によってこれを求めれば、その物の理を明らかにできる。心と目には少しの差もないので、物事に対応するのにも自然とほとんど誤りがないことになる。こうして意は誠実に、心は正しくなって身おさは修まり、家が整い、国が治まり、天下が泰平たいへいになる。すべてこのことによるのである。(『朱子文集』より)



## デジタル原典資料

第1編 | 第2章 | 7節 3 老荘思想

→教科書 p.73

## 真人

古の真人は、生を説ぶことを知らず、死を悪むことを知らず。其の出ずるも訴ばず、其の入るも距まず。翛然として往き、翛然として来たる已矣。其の始まる所を忘れず、其の終わる所を求めず。受けて之を喜び、忘れて之を復す。是れを之、心を以て道を捐てず、人を以て天を助けず、と謂う。是を之、真人と謂う。

〔現代語訳〕いにしへの真人は、生を喜ぶこともなく、死を憎むこともない。この世に生まれ出ること  
も喜ばず、死の世界にはいることも拒まない。悠然と行き、悠然と来るのみである。生のはじまる場  
所を忘れることもないが、生の終わる場所を求めることもない。生を喜んで受けるが、生を返すとき  
はその喜びを忘れる。このことを、「心によって道ですてることなく、人為で天の働きを助けること  
をしない」というのである。このような人を、真人とよぶ。 (『莊子』より)

-----  
 莊子は、天地自然と一体となり(逍遙遊)、生死をはじめとするあらゆることをそのまま受け入れる真人を理想とした。彼は自分の妻が死んだときにも動じずに、そのことを受け入れていたという。



## 2 老子のことば

- ・最上の善とは水のようなものだ。水は、あらゆるものにめぐみを与え、争わず、多くの人がいやがる低い場所にいる。ゆえに道に近い。
- ・真実の道が<sup>すた</sup>廃れて、<sup>じん</sup>仁や<sup>ぎ</sup>義が説かれるようになった。人が知恵をもつようになって、うそや<sup>いつわ</sup>偽りが多くなった。親族が不和になって、<sup>こうこう</sup>孝行や<sup>じあい</sup>慈愛が説かれるようになった。国家が乱れて、忠臣が目を引くようになった。
- ・学問するのをやめれば、<sup>うれ</sup>憂いはなくなる。
- ・人は地を手本とし、地は天を手本とし、天は道を手本とし、道は自然を手本とするものである。
- ・道とされている道は、つねなる道ではない。(『老子』より)

## 4 胡蝶の夢

昔、私・<sup>そうしゅう</sup>莊周は、夢の中で<sup>ちよう</sup>蝶になっていた。ひらひらとして、蝶そのものだった。楽しんでのびのびしていた。そして、自分が莊周であることに気づかなかった。ふと目が覚めると、まぎれもなく莊周であった。莊周が夢の中で蝶となっていたのか、蝶が夢の中で莊周となっていたのか、どちらが本当かわからないのである。(『莊子』より)

vol.  
06

## 思考問題セクション 倫理

問題編

→教科書 p.73

次の説明文は、倫理の授業で先生が中国の思想について説明したときのものである。

## 説明文

「万物は無から生じて無に帰る。この無から有、有から無への運動は、永遠に繰り返され、すべてのものは変転する。したがって人々が福と思ひ禍と思ふものも絶対的ではなく、福はやがて禍に、禍もやがて福に転ずるものである。」

このように説いた **a** は、道徳や文化などは人間が作為した相対的なものであると考え、儒家の教える道徳は世が乱れたためにやむをえず説かれたものであり、本当の道ではないと考えました。彼はそのことを「大道廢れて仁義有り」といい、われわれに必要なことは、仁・義・礼・智を説くことではなく、仁・義・礼・智のいない社会をつくることであるとし、自然と調和した生き方を主張しました。

高校生Wは、上の先生の説明文を聞いた後に、これまでの授業で扱われてきた中国の思想家の言葉を抜粋したカードを眺めた。次のア～ウは、孟子、墨子、老子のうち、いずれかの人物の言葉を抜粋したカードである。説明文中の **a** に当てはまる人物と、**a** の人物の言葉を抜粋したカードの組合せとして最も適当なものを、後の①～⑨のうちから一つ選べ。

ア

魚も食べたいが、熊の手のひらも食べたい。両方一緒に得ることができないのであれば、魚を捨てて熊の手のひらを取る。生きることも欲するが、正しく生きること(義)も欲する。両方一緒に得ることができないのであれば、生きることを捨てて義を取る。生きることもまた私の欲するものだが、私には生きることよりも欲するもの(すなわち義)がある。だから、それを捨ててまでも生きていこうとはしないのである。死ぬこともまた私の嫌うところであるが、私には死ぬこと以上に嫌うもの(すなわち不義)がある。だから、死の恐れがあってもそれを避けないのである。

イ

一人を殺せば、これを不義といって、必ず死罪となる。この考えでいけば、十人を殺せば、不義は十倍となり、必ず十の死罪ということになる。百人を殺せば、不義は百倍となり、必ず百の死罪ということになる。このようなことを天下の君子はみな知っており、人を殺すことは間違っていると、不義であるという。しかし、大いに不義を為して国を攻めるに至っては、これを非とすることを知らず、これをほめて義であるという。まことにそれが不義であることを知らないのである。

ホームへ

## 書名入る

< 第1編第2章 さまざまな人生観・倫理観・世界観 1 >

- 1節 哲学すること >
- 2節 ギリシャの思想 >
- 3節 宗教と社会 >
- 4節 ユダヤ教とキリスト教 >
- 5節 イスラーム >
- 6節 古代インドの思想と仏教 >
- 7節 中国の思想 >
- 8節 芸術**

75ページ 読み上げ音声24 (p.75~76) →別紙 3-1

75ページ デジタル原典資料 (第1編第2章8節1) →別紙 12-1

77ページ 読み上げ音声25 (p.77) →別紙 3-1

書名入る > 第1編第2章 さまざまな人生観・倫理観・世界観 1



## デジタル原典資料

第1編 | 第2章 | 8節 | 1 美の発見と芸術の創造・鑑賞

→教科書 p.75

## 美しいものの判断

あるものが美しいか美しくないかを区別するために、われわれは表象を、悟性<sup>ごせい</sup>によって認識のために客観へと関連づけるようなことはしない。むしろ、われわれは表象を、(おそらく悟性と結びついた)構想力(想像力)を通して、主観および主観の快・不快の感情へと関係づける。そのため趣味判断は認識判断ではなく、したがって論理的なものではなく、美的(直感的)なものである。それが美的(直感的)であるということで理解されるのは、それを規定する根拠が主観的なものでしかありえないような判断である、ということである。(カント『判断力批判』より)

「趣味判断」の「趣味」とは、美しいものを判断するための能力を指す。カントは、美しいものの判断には悟性(知性)と構想力(想像力)が関係していると考えた。

ホームへ

## 書名入る

< 第1編第3章 さまざまな人生観・倫理観・世界観 II >

1節 近代と人間尊重の精神

2節 近代思想の展開 >

3節 人格の尊厳と人倫の思想 >

4節 社会変革の思想 >

5節 理性への疑念 >

6節 人間観の問いなおし >

7節 他者・自然とのかかわり >

読み上げ音声 (第1編第3章) →別紙 3-1

84ページ 読み上げ音声26 (p.84~90) →別紙 3-1

84ページ デジタル原典資料 (第1編第3章1節1) →別紙 13-1

書名入る > 第1編第3章 さまざまな人生観・倫理観・世界観 II



## デジタル原典資料

第1編 | 第3章 | 1節 | 1 人間主体の時代

→教科書 p.84

## 聖書中心主義

魂<sup>たましい</sup>は、聖なる福音<sup>ふくいん</sup>、すなわちキリストによって教えられた神のことば以外に、みずからを生かし、義とし、自由にし、キリスト者であるようにするものを、天においても、地においても、何ももっていない。……それゆえ、私たちは、魂は神のことば以外の何がなくてもすませられるが、もし神のことばがなかったら、ほかのどのようなものをもってしてもそのかわりにはならないことを確信しなければならない。

(ルター『キリスト者の自由』より)

ルターは聖書のことばを重視し、一人ひとりが聖職者をはさまず直接に聖書のことばに向きあうことが大切であるとした。

## 職業召命観

最後に、主なる神<sup>しゅ</sup>は、われわれの一人ひとりに、生活のあらゆる行動において、自分の召命<sup>しょうめい</sup>を重んじるように命じておられることに、注意しなければならない。……主は、生活のあらゆる領域において、あらゆる人にそれぞれの特別な義務を定められた。そして、だれもがその限界を超えないよう、このような生活のあり方を「召命」とよんだ。いわば、各人が生涯<sup>しょうがい</sup>の全行程において目的なくさまようことのないよう、主によって任じられた持ち場のようなものである。……さらに、心配や労苦、困難、その他の重荷を負う中であって、神がこれらすべてのことにおいて自分の導き手であることを知っていれば、少なからぬなぐさめとなるであろう。……なぜなら、どれほど賤<sup>いや</sup>しく下劣な仕事であっても、(「召命」にしたがいさえすれば)神の前で輝き、真に尊<sup>まがや</sup>くないものはないからである。

(カルヴァン『キリスト教綱要』より)

カルヴァンはルターの職業召命観を徹底し、みずからの職業生活を神から与えられたものとして受けとめ、それに精進<sup>しんじん</sup>することをすすめた。また、神が定めた職業に貴賤<sup>きせん</sup>はないとした。

[次ページへつづく]

ホームへ

書名入る

< 第1編第3章 さまざまな人生観・倫理観・世界観 II >

1節 近代と人間尊重の精神 >

2節 近代思想の展開

3節 人格の尊厳と人倫の思想 >

4節 社会変革の思想 >

5節 理性への疑念 >

6節 人間観の問いなおし >

7節 他者・自然とのかわり >

読名入る > 第1編第3章 さまざまな人生観・倫理観・世界観 II

91ページ 読み上げ音声27 (p.91~93) →別紙 3-1

91ページ デジタル原典資料 (第1編第3章2節1) →別紙 14-1

91ページ 思考問題セレクション 倫理 vol.7 →別紙 14-2

94ページ 読み上げ音声28 (p.94~95) →別紙 3-1

94ページ デジタル原典資料 (第1編第3章2節2) →別紙 14-3

96ページ 読み上げ音声29 (p.96~99) →別紙 3-1

96ページ デジタル原典資料 (第1編第3章2節3) →別紙 14-4



## デジタル原典資料

第1編 | 第3章 | 2節 1 新しい学問の方法

→教科書 p.91

## 良識とは

良識りょうしきとは、この世で最も公平に与えられたものである。……よく判断し、真まと偽ぎを区別する能力、これこそ本来は良識または理性と名づけられるものだが、すべての人において生まれつき平等に備わっているということである。したがって、われわれの意見が多様であるのは、ある者が他の者よりもより理性的であることによるのではなく、ただ、われわれが自分の考えをさまざまな道へと導き、同一どういつのことを考えているのではないということによるのである。というのも、よい精神をもつだけではじゅうぶんでなく、大切なのは、精神をよく用いることだからである。

(デカルト『方法序説』より)

---

理性(良識)の働きを重視するデカルトの立場が明確に示されている。

vol.  
07

## 思考問題セレクション 倫理

問題編

→教科書 p.91

ベーコンは、知識を得るにあたっては、人間がもつ偏見や先入観である「イドラ」を排除する必要があるとした。次のア・イはそれぞれどの「イドラ」に該当すると考えられるか。その組合せとして最も適当なものを、後の①～④のうちから一つ選べ。

ア 自然研究の歴史において、たとえば「フロギストン(燃素)」という元素や「天球」といった概念が想定され議論されてきたが、そうした概念が実在するものとして通用してきた。これまでなされてきた高名な学者たちの論争というのも、しばしば概念や名称についての争いなのであった。

イ 知識は経験に基づいて習得され蓄積されるものであるとはいえ、自分の狭い経験だけに頼ったのでは正しい知識を得ることはできない。個人的な思い込みや性格の偏りによって事柄をゆがめて認識することは、決して珍しいことではないからである。

- ① アー市場のイドラ      イー種族のイドラ
- ② アー劇場のイドラ      イー洞窟のイドラ
- ③ アー市場のイドラ      イー洞窟のイドラ
- ④ アー劇場のイドラ      イー種族のイドラ



## 知覚の束

私についていうと、私が自分自身とよぶものに最も深くわけ入るとき、私が出くわすのは、つねに、熱さや冷たさ、明るさや暗さ、愛や憎<sup>にく</sup>しみ、苦や快などの個々の知覚である。私はいかなるときにも、個々の知覚なしに自分自身をとらえることはけっしてできず、また知覚以外のものを観察することも、けっしてできない。例えば、深い眠りのためにしばらくのあいだ私の知覚がとり去られるときには、私はそのあいだ、私自身を感じていない。実際のところ、そのあいだ、私は存在していないといってもよかろう。……そこで、私はあえてつぎのように主張してみようと思う。すなわち、人間とは、思いえがけないほどの速さでたがいに<sup>けいき</sup>継起し、たえず変化し、動きつづけるさまざまな知覚の束<sup>たば</sup>あるいは集合にはかならない、と。 (ヒューム『人間本性論』より)

私たちは、知覚とは別個に「私自身」や「心自体」について観察することができない。私たちが「私自身」とか「心」とよぶものは、諸知覚が生成継起する「劇場」のようなものにすぎない。それにもかかわらず、私たちの多くは「私自身」という人格の<sup>どういつ</sup>同一性を信じている。そこでヒュームは、私たち人間がさまざまな信念(人格の同一性だけでなく、<sup>いんが</sup>因果的な見方や善悪の区別などについての信念)をもつときに、継起する諸知覚がどのように束ねられているのかを問い、探究した。



## デジタル原典資料

第1編 | 第3章 | 2節 3 社会契約説

→教科書 p.96

## 国家の誕生

外敵の侵入や相互の侵害から人々を守ることによって安全を確保し、みずからの勤労と大地から得る収穫によって人々がみずからを養い、満足して生活することを可能にするような公的な権力を樹立する唯一の方法は、人々の権力と強さを一人の人間か合議体に与え、すべての人の意志を声の多数性によって一つの意志に結集できるようにすることである。……そして、自分たち個々の意志を彼の意志に、自分たちの判断を彼の一つの判断に服従させることである。……このことがなされると、一つの人格に統合された群衆は「コモンウェルス(commonwealth)」、ラテン語では「キウイタス(civitas)」とよばれる。こうして、かの偉大なる「リヴァイアサン」、いやむしろ(もっと敬虔にいえば)「不死の神」のもとにあって私たちの平和と防衛を請け負ってくれる「可死の神」が生まれるのである。(ホブズ『リヴァイアサン』より)

ホブズによれば、コモンウェルス(国家)を樹立する目的は、人々を外敵の侵入や相互の侵害から守ることによって安全を確保するためであるという。そして、それを樹立する方法は、人々に選ばれた共通権力を「一つの統合された群衆」と見なし、各人がその意志や判断に服従することによって、その権力に強さを与えることであるという。統合された権力が法の支配のもと平和を確保するという近代国家観の一つが、ここに示されている。

ホームへ

## 書名入る

< 第1編第3章 さまざまな人生観・倫理観・世界観 II >

1節 近代と人間尊重の精神 >

2節 近代思想の展開 >

3節 人格の尊厳と人倫の思想

4節 社会変革の思想 >

5節 理性への疑念 >

6節 人間観の問いなおし >

7節 他者・自然とのかかわり >

100ページ 読み上げ音声30 (p.100~103) →別紙 3-1

100ページ デジタル原典資料 (第1編第3章3節1) →別紙 15-1

100ページ 思考問題セレクション 倫理 vol.8 →別紙 15-2

104ページ 読み上げ音声31 (p.104~106) →別紙 3-1

104ページ デジタル原典資料 (第1編第3章3節2) →別紙 15-3

書名入る > 第1編第3章 さまざまな人生観・倫理観・世界観 II



## デジタル原典資料

第1編 | 第3章 | 3節 1 カント—人格の尊厳

→教科書 p.100

## 永遠平和のための予備条項

- 第1条項 将来の戦争の種をひそかに保留して結ばれた平和条約は、平和条約と見なされてはならない。
- 第2条項 独立しているいかなる国家(小国か大国かは問題ではない)も、<sup>けいしょう</sup>継承、交換、<sup>そうよ</sup>買収、または贈与によって、ほかの国家に取得されてはならない。
- 第3条項 常備軍は、いずれ全廃しなければならない。
- 第4条項 対外紛争のために、国債を発行してはならない。
- 第5条項 いかなる国家も、ほかの国家の体制や統治に、暴力をもって<sup>かんしゅう</sup>干渉してはならない。
- 第6条項 いかなる国家も、ほかの国家との戦争において、将来の平和時においてたがいの信頼を不可能にしてしまうような行為をしてはならない。

(カント『永遠平和のために』より)

-----

カントは国家を道徳的人格としてとらえ、戦争や侵略を否定した。そして、平和こそ、国家の<sup>じつぎん</sup>実践理性が命じる道徳法則であると考えた。

高校生 X と高校生 Y は、授業中に配付された次の資料を読み、後の会話を交わした。会話文中の  ・  に当てはまる記述の組合せとして最も適当なものを、後の①～④のうちから一つ選べ。

## 資料

われわれが心がけなければならないのは、道徳法則による判定を、自らのすべての行為と他人の自由な行為を観察することにとまなう当然の仕事とし、それをいわば習慣とすることである。さらに、その行為が客観的に道徳法則に適合しているかどうか、しかもどのような道徳法則に従っているかをまず問うことで、その判定を研ぎ澄ます必要がある。……

何度もくり返し長い時間をかけて考えれば考えるほど、いよいよ強い感嘆と畏敬とで心を満たすものが、二つある。私の上なる星空と、私の内なる道徳法則とである。

(カント『実践理性批判』より)

X：この資料は、カントが道徳法則について述べた箇所の一部を抜粋したものだね。

Y：カントは、自然界に自然法則が存在しているように、人間には従うべき道徳法則があると考えたんだよね。授業では、道徳法則というのは、 なんだと学習したよね。

X：この資料からは、カントの  という考えが読み取れるね。

- ① a 神あるいは権威のある者が、人間ならばだれでも当然こうすべきであると迫る形で発する命令  
b 道徳法則に従って判断することは当然のことであって、道徳法則に対する畏敬の念や嫌悪感を抱くことは間違っている
- ② a 神あるいは権威のある者が、人間ならばだれでも当然こうすべきであると迫る形で発する命令  
b 道徳法則に従って判断する習慣を身に付けるとともに、自身の行為が道徳法則にかなっているかどうかについてよく考える必要がある
- ③ a 人類共通の普遍的な理性が、さまざまな欲望に流されやすい個々の人間に対して下す命令  
b 道徳法則に従って判断することは当然のことであって、道徳法則に対する畏敬の念や嫌悪感を抱くことは間違っている
- ④ a 人類共通の普遍的な理性が、さまざまな欲望に流されやすい個々の人間に対して下す命令  
b 道徳法則に従って判断する習慣を身に付けるとともに、自身の行為が道徳法則にかなっているかどうかについてよく考える必要がある



## デジタル原典資料

第1編 | 第3章 | 3節 2 ヘーゲル—人倫の思想

→教科書 p.104

## 精神とは何か

真なるものは体系としてのみ現実的であるということ、あるいは、実体は本質的に主体であるということは、絶対者(神)を精神としてとらえる考え方<sup>うち</sup>の内に表現されている。この「精神」とは、最も崇高な概念<sup>すうこう がいねん</sup>であり、近代とその宗教とに属する概念である。精神的なものだけが現実的なものである。まず、それは実在であり、それ自身においてあるものである。そして、他との関係の中であって、規定されたもの、他としてあり自分に対してあるものである。そしてさらに、このように規定され自分の外にありながら、自分自身の内にとどまっているものである。(ヘーゲル『精神現象学』より)

ヘーゲルのいう「精神」とは、みずからの内実を形づくりながら、みずからを知ろうとして、みずからの本質である自由を自己展開していく運動体である。そして、現実世界のすべてのものは、精神(理性)の自己展開の過程のあらわれである。このことをヘーゲルは、「理性的なものは現実的であり、現実的なものは理性的である」(『法の哲学』)とも表現している。

ホームへ

書名入る

< 第1編第3章 さまざまな人生観・倫理観・世界観 II >

1節 近代と人間尊重の精神 >

2節 近代思想の展開 >

3節 人格の尊厳と人倫の思想 >

4節 社会変革の思想

5節 理性への疑念 >

6節 人間観の問いなおし >

7節 他者・自然とのかわり >

読名入る > 第1編第3章 さまざまな人生観・倫理観・世界観 II

107ページ 読み上げ音声32 (p.107~109) →別紙 3-1

107ページ デジタル原典資料 (第1編第3章4節1) →別紙 16-1

110ページ 読み上げ音声33 (p.110~112) →別紙 3-1

110ページ デジタル原典資料 (第1編第3章4節2) →別紙 16-2

113ページ 読み上げ音声34 (p.113~115) →別紙 3-1

113ページ デジタル原典資料 (第1編第3章4節3) →別紙 16-3

113ページ 思考問題セレクション 倫理 vol.9 →別紙 16-4



## デジタル原典資料

第1編 | 第3章 | 4節 | 1 功利主義と幸福

→教科書 p.107

## 共感

人はどれだけ利己的であると思われようとも、人間本性の中には、他人の運不運に関心をもたせ、他人の幸福を、それをながめることから得られる快樂以外には何も得られないのに、自分にとって必要なものとするいくつかの諸原理が明らかに存在する。あわれみや同情がこの種のもので、他人の悲惨を見たり、いきいきとした仕方で思いえがかされたりしたときに、私たちが感じる情動である。

(アダム・スミス『道徳感情論』より)

私たちは、権力の介入なしにどこまで利己心を自制し、協力しあって生活を改善することができるのか。共感とはどのような力で、私たちの道徳感情や社会にどのような影響をおよぼすのかということ、スミスは探究している。

## 質的功利主義

二つの快樂のうち、両方を経験したすべての人、あるいはほとんどすべての人が、道徳的責務の感情と関係なしにきっぱりと選ぶ快樂があるならば、そちらの快樂の方がより望ましい快樂である。二つの快樂の両方をよく知っている人々が、そのうちの一方を他方よりもはるかに高く評価し、他方よりも多くの不満が付随するとわかっていても、そして他方の快樂がその性質からして大量の快樂をもたらしうるとしても、その快樂をあきらめようとしない場合、彼らを選ぶ快樂のほうが質的にすぐれていると考えてよい。二つの快樂を比較するとき、快樂の量をあまり考慮しなくてよいほど質的に優越しているのである。……高度な能力をもった人は、自分が探している幸福が世界の現状では不完全であるとおつねに感じるだろう。しかしそのような人でも、その不完全さが忍耐の範囲内であれば、忍耐できるようになる。そして彼らは不完全さにまったく気づかないような人々をうらやましいとは思わない。不完全さの中で得られるものを少しもよいと感じないという理由だけで、うらやましいと思わないのである。満足した豚であるよりは不満足な人間である方がよく、満足した愚か者であるよりは不満足なソクラテスである方がよい。愚か者や豚が自分と異なる意見をもっているとしても、それは彼らが問題についての自分たちにかかわる側しか知らないためである。その対極にある人々は、問題の両側がわかっているのだ。(J.S.ミル『功利主義論』より)

ミルはベンサムのように快樂の量だけを問題にするのではなく、快樂の質の差に注目する。高度な能力をもつ人の、質の劣った快樂に満足する低劣な存在に身を落としたくないという気持ちは「尊厳の感覚」からくると、ミルは考えた。



## デジタル原典資料

第1編 | 第3章 | 4節 2 社会主義思想

→教科書 p.110

## 唯物史観

人間たちは、みずからの生活を社会的に生産するにあたって、彼らの意志から独立した一定の関係を、すなわち彼らの物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係を取り結ぶ。この生産諸関係の総体が社会の経済的構造を形成し、これが現実的な土台となって、その上に法的・政治的な上部構造がそびえ立つ。さらに、一定の社会的意識の諸形態が、この現実的な土台に対応する。物質的生活の生産様式が、社会的、政治的、精神的な生活の諸過程一般を制約するのである。人間の意識が人間の存在を規定するのでなく、逆に、人間の社会的存在が人間の意識を規定するのである。社会の物質的生産諸力は、生産諸関係の中で、あるいは、それを法的に表現しただけだが、所有諸関係の中で、発展しつづける。しかし、その発展がある段階に達すると、既存の生産諸関係および所有諸関係と矛盾するようになる。これらの諸関係は、生産諸力を発展させる形式から、これを束縛するものへと転じる。このときに、社会革命の時代がはじまるのである。経済的土台の変化にともなって、巨大な上部構造の全体が、徐々に、あるいは急激に転換する。 (マルクス『経済学批判』より)

それまでの哲学では、人間の精神のあり方が歴史を形づくる土台として考えられていたのに対して、マルクスは、物質的(経済的)な生産様式と生産関係が土台となって歴史が発展していくとらえた。



## デジタル原典資料

第1編 | 第3章 | 4節 | 3 社会の進歩と実証的思想

→教科書 p.113

## 真理と実在

私たちの疑いを晴らすには、どうしてもある一つの方法を見つけなければならない。……すべての人が同じ結論にならざるをえないような方法、それが科学の方法にほかならない。この方法をささえる根本的想定は、もっと親しみやすいことばをつかうとつぎようになる。実在する事物が存在する。それについての私たちの意見から完全に独立した性質をもつこの実在物は、規則的な法則にしたがって私たちの感官に作用をおよぼす。その結果生じる私たちの感覚は、対象との関係にしたがって種々異なるが、知覚の法則を用いて、事物が実際にそして真にどのように存在するかを推論によって確認することができる。そして、だれであれじゅうぶんな経験をもち、それについてじゅうぶんな推論をおこなえば、一つの真なる結論に導かれることになる。ここで導入された新たな概念こそ、「実在」という概念である。（パース『信念の固定の仕方』より）

パースは、「科学の方法」を通じて推論を洗練させていけば「すべての人が同じ結論」へと収束していくと考え、その結論こそ真理（「真なる結論」）であるとのべている。そして、その真理によって表象される事物を「実在」とよんでいる。

## 民主主義と教育

私たちの基準における二つの要素は、どちらも民主主義を指し示している。第一の要素は、共有された共通関心がより多くの、そしてより多様な点に向かうことを意味するだけでなく、相互の関心を社会的統制の一要因と見なすことにより大きな信頼をおくことを意味している。第二の要素は、……社会集団がより自由に相互にかかわりあうことを意味するだけでなく、社会的習慣に変化が生じること——多様な相互作用によって生まれる新たな状況への出会いを通して社会的習慣が連続して再調整されること——を意味している。以上の二つの特性こそ、民主的に構成された社会の特徴である。教育の面で注目すべきは、つぎの点である。すなわち、利害関心が相互に浸透しあっていて、進歩や再調整が考慮すべき重要な事項となるような社会生活の実現によって、民主的共同体は、ほかの共同社会よりも、計画的で体系的な教育によりいっそう関心を向けるようになるという点である。（デューイ『民主主義と教育』より）

ここでデューイがのべている「基準」とは、「意識的に共有された関心が、いかに多く、いかに多様か」という基準と、「他の種類の集団との相互作用が、いかに充実し、いかに自由か」という基準である。この二つの基準を満たそうとする実践を通して生まれた民主的共同体は、教育にいっそうの関心をはらうようになる、とデューイは考えている。

vol.  
09

## 思考問題セレクション 倫理

問題編

→教科書 p.113

次の文章は、プラグマティズムの大成者とされるデューイによるものである。文章中の空欄  ~  に当てはまる最も適当な記述を、後のそれぞれの①・②のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

理性は実験的知性であり、科学を手本として考えられ、社会的技術の創造に用いられている。……理性は、無知や偶然のせいで硬化して習慣となった過去の束縛から人を解放する。理性は、よりよい未来をえがき、人がそれを実現することを助けてくれる。そして、理性の働きは、常に  において検証されなければならない。つくられる計画や、再建的な行動の手引きとして人が立てる原理は、ドグマ\*ではない。それらは、実践において理解される仮説であり、私たちの現在の経験に必要な手引きを与えることに失敗するか成功するかに応じて却下されたり、修正されたり、拡張されたりするものである。それらを行動プログラムとよんでもよいが、それらは、私たちの未来の行動をより見通しが利き、より方向の確かなものとするために使用されるべきものなので、柔軟なものである。知性は、一度ですべて手に入れられるものではない。知性は、不断の形成過程にあり、それを保持するためには  が必要である……。

ここでは、概念、理論、体系というのは、いかに精巧につくられ、首尾一貫していても、仮説と見なさなければならないということに注意すれば十分である。……それは、概念、理論、思想体系は、使用を通じてさらに発展することに常に開かれているということの確認である……概念、理論、思想体系は、道具である。すべての道具の場合と同じように、その価値は、 にある。 (デューイ『哲学の改造』より)

\*ドグマ：独断、独断的な説。

- ① 経験  
② 論理
- ① 理性は経験を越えたものであるから、知性は経験によって確認できないものだとする認識  
② 常に油断せず結果を観察する注意深さと、偏りのない学習意欲と、再適応することへの勇氣
- ① それ自体にあるのではなく、その使用の結果に示される作業能力  
② その使用の結果に示される作業能力にあるのではなく、それ自体

ホームへ

## 書名入る

< 第1編第3章 さまざまな人生観・倫理観・世界観 II >

116ページ 読み上げ音声35 (p.116~121) →別紙 3-1

116ページ デジタル原典資料 (第1編第3章5節1) →別紙 17-1

116ページ 思考問題セレクション 倫理 vol.10 →別紙 17-2

1節 近代と人間尊重の精神 >

2節 近代思想の展開 >

3節 人格の尊厳と人倫の思想 >

4節 社会変革の思想 >

5節 理性への疑念

6節 人間観の問いなおし >

7節 他者・自然とのかわり >

書名入る > 第1編第3章 さまざまな人生観・倫理観・世界観 II



## デジタル原典資料

第1編 | 第3章 | 5節 | 1 世界をとらえる知のあり方の変容

→教科書 p.116

## 永遠回帰

ああ、私たちはあなた(ツァラトウストラ)の教えることを知っている。すべてのものごとは永遠に回帰するのだ。そして私たちもそれとともに回帰する。また、私たちはすでに無限の回数にわたって存在していたのであり、すべてのものごととも私たちとともに無限の回数にわたって存在していたのだ。

あなたはこのように教える。生成の循環じゅんかんがおこなわれる、大いなる年がある。途方もなく巨大な年が。その年は、砂時計のように、何度もくり返しひっくり返って、はじめにもどる。何度も新たにはじまり、終わりゆくのだ。

だから、この大いなる年は、どれもたがいに等しいのだ、その最大のことににおいても、最小のことににおいても。——だから私たち自身も、どの大いなる年にあっても、等しいのだ。最大のことににおいても、最小のことににおいても。

(ニーチェ『ツァラトウストラはこう語った』より)

## 運命愛

きみたちはかつて、一度あったことを二度あれと欲ほつしたことがあるか。「私はおまえのことが気に入った。幸福よ、束の間よ、瞬間よ」と言ったことがあるなら、きみたちはすべてのものがもどってくることを欲したのだ。

すべてのものを、新しく、永遠に、そしてすべてのものが鎖くさりでつながれ、糸でつながれ、愛で結ばれたものとして、ああ、きみたちはこの世界をそのようなものとして愛したのだ。

きみたち永遠なる者よ、この世界を永遠に、ずっと、愛しなさい。そして苦痛に対してもこう言うがよい、「過ぎ去ってくれ、しかしまたもどってきてくれ」と。というのも、すべての悦よろこびは——永遠を欲するからだ。

(ニーチェ『ツァラトウストラはこう語った』より)

ニーチェは、ニヒリズムの極限の形態として、世界が意味もなく永遠にくり返されるという、永遠回帰の状態をえがいた。そして、永遠回帰の世界を肯定し引き受けることができる境地を運命愛とよび、運命愛にいたってニヒリズムを克服した人間を超人とよんだ。

[次ページへつづく]

vol.  
10

## 思考問題セクション 倫理

問題編

→教科書 p.116

高校生 Z は、授業中に配付された次の資料を読み、先生 T と後の会話を交わした。会話文中の [ a ] ・ [ b ] に当てはまる記述や語句の組合せとして最も適当なものを、後の①～④のうちから一つ選べ。

## 資料

ディオニュソスのものは、陶酔という類比によって、われわれにとってきわめてわかりやすくなる。すべての原始的な人間や民族が讃歌の中で語っている麻酔的な飲み物の影響によって、あるいはすべての自然を歓喜で満たす力強い春の訪れに際して、あのディオニュソス的な興奮はめざめる。その興奮が高まるとき、主観的なものは消え去って、完全にわれを忘れた状態になる。……ディオニュソス的なものの魔力のもとでは、人間と人間のあいだの結びつきがふたたび結びあわされるだけではない。疎外され、敵視され、あるいは抑圧されてきた自然も、その放蕩息子である人間との和解の祝祭をふたたびあげるのだ。  
(ニーチェ『悲劇の誕生』より)

T：『悲劇の誕生』を著したニーチェは、ギリシャ悲劇の成立とその盛衰を、「アポロ的なもの」と「ディオニュソス的なもの」という二つの対立概念を用いて論じました。資料は「ディオニュソス的なもの」について述べられた部分を抜粋したものです。

Z：ディオニュソスは、ギリシャ神話に登場する豊穰とブドウ酒の神でしたよね。ニーチェは、「ディオニュソス的なもの」、いわゆる [ a ] こそが人間同士を結び付けたり、人間を突き動かしたりする根源的なものであると指摘したのです。

T：その通りです。ニーチェは、「ディオニュソス的なもの」の働きを洞察していた古代ギリシャの人々は偉大であったと論じています。そして、自己の思想の拠り所を、まだ人間が自然のうちに息づき、その生き生きとした生命力が肯定されていたソクラテス以前の古代ギリシャ文化のうちに見いだしました。

Z：なるほど。ニーチェは、より強くなろうとする「 [ b ] 」が世界を変える原動力と考えた人物でしたよね。そして、この「 [ b ] 」にしたがって創造的に強く生き、より高く優れたものになろうとするところに人間本来のあり方があると主張しました。そうしたニーチェの思想的な出発点は、古代ギリシャ悲劇の精神にあった、ということですね。

T：そういうことになりますね。

- |     |                |   |        |
|-----|----------------|---|--------|
| ① a | 理性ではとらえきれない衝動  | b | 力への意志  |
| ② a | 理性ではとらえきれない衝動  | b | ルサンチマン |
| ③ a | 理性に従って静観し観想する力 | b | 力への意志  |
| ④ a | 理性に従って静観し観想する力 | b | ルサンチマン |

ホームへ

## 書名入る

< 第1編第3章 さまざまな人生観・倫理観・世界観 II >

122ページ 読み上げ音声36 (p.122~126) →別紙 3-1

122ページ デジタル原典資料 (第1編第3章6節1) →別紙 18-1

127ページ 読み上げ音声37 (p.127~130) →別紙 3-1

127ページ デジタル原典資料 (第1編第3章6節2) →別紙 18-2

131ページ 読み上げ音声38 (p.131~132) →別紙 3-1

1節 近代と人間尊重の精神 >

2節 近代思想の展開 >

3節 人格の尊厳と人倫の思想 >

4節 社会変革の思想 >

5節 理性への疑念 >

6節 人間観の問いなおし

7節 他者・自然とのかかわり >

書名入る > 第1編第3章 さまざまな人生観・倫理観・世界観 II



## 生活世界の探究

客観性の理念は近代の実証的な学問全体を支配しており、「学問」ということばも一般的にその意味でつかわれている。……生活世界における主観的なものと、「客観的な」世界、すなわち学問的に「真実の」世界とをくらべると、後者が理論的－論理的な基体であり、原理的にそれを知覚することができず、原理的にそれ自体の存在を経験できないものであるのに対して、生活世界的に主観的なものはまさしくすべてにおいて実際に経験できるものである。

生活世界は根源的な明証性の領域である。明証的に与えられるものとは、知覚において何ものも差しはさまずに現前し「それ自体」として知覚されるもの、あるいは記憶において「それ自体」として想起されるものである。……この明証性のもつ本来の権利、すなわち客観的－論理的明証性とくらべて認識の基礎づけとしてより高い尊厳をもつことを主張することこそ、生活世界を学問的に探究するにあたって、非常に重要な課題である。

(フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』より)

---

フッサールは、世界を客観的に理解しようとする従来の学問(科学)と、私たちの主観的な経験の場である生活世界を対比的に提示している。そして、生活世界こそ諸学問の基礎を成すものであると説いている。

[次ページへつづく]



## デジタル原典資料

第1編 | 第3章 | 6節 2 新たな知の枠組み

→教科書 p.127

## 規格化する権力

この閉鎖<sup>へいさ</sup>され、分割され、あらゆる箇所<sup>かしよ かんし</sup>で監視されている空間では、個々人は固定した場所に配置され、わずかな動きでさえとり締<sup>し</sup>まれ、あらゆる出来事が記録され、たえまのない帳簿<sup>ちようぼ</sup>記入作業が中心部と周辺部をつないでいる。そして、権力が連続的な階層構造の図式にしたがって全面的に行使され、個々人はたえず識別されて、生存者、病者、死者にふりわけられる——これらすべてが規律訓練的な装置のコンパクトなモデルを構成しているのである。 (フーコー『監獄<sup>かんごく</sup>の誕生』より)

フーコーは、近代における権力を、個々人を内面からコントロールする規律訓練型の権力であるとした。この文章では、その権力のあり方を、17世紀末のヨーロッパのベスト流行下における民衆管理の方法になぞらえて整理している。それは、個々人をそれぞれ閉じられた空間の中において、監視することであった。そして、そのような権力の技術は、学校や病院、工場などで広く見られるものであると指摘した。

ホームへ

書名入る

第1編第3章 さまざまな人生観・倫理観・世界観 II

1節 近代と人間尊重の精神 >

2節 近代思想の展開 >

3節 人格の尊厳と人倫の思想 >

4節 社会変革の思想 >

5節 理性への疑念 >

6節 人間観の問いなおし >

7節 他者・自然とのかかわり

134ページ 読み上げ音声39 (p.134~137) →別紙 3-1

134ページ デジタル原典資料 (第1編第3章7節1) →別紙 19-1

138ページ 読み上げ音声40 (p.138~139) →別紙 3-1

140ページ 読み上げ音声41 (p.140~141) →別紙 3-1

140ページ デジタル原典資料 (第1編第3章7節3) →別紙 19-2

140ページ 思考問題セレクション 倫理 vol.11 →別紙 19-3

142ページ 読み上げ音声42 (p.142~144) →別紙 3-1

書名入る > 第1編第3章 さまざまな人生観・倫理観・世界観 II



## デジタル原典資料

第1編 | 第3章 | 7節 | 1 他者とのかわり

→教科書 p.134

## アウラの喪失

ここで失われてゆくもの(芸術作品のもつ権威や伝承された重みなど)をアウラという概念でひとまとめにして、複製技術時代において滅びゆくものは芸術作品のアウラである、ということができるだろう。この過程は一つの徴候である。この過程のほらむ意味は、芸術の分野をはるかに超えておよぶ。複製技術は——一般論としてつぎのように定式化できよう——複製される対象を伝統の領域から引き離す。複製技術は、複製を大量につくり出すことによって、複製される対象を、一回かぎりの出現のかわりに、大量に出現させる。そして、複製がそれぞれの状況にある受け手へと近づくことを可能にすることによって、複製される対象にアクチュアリティを与える。この二つの過程によって、伝承されてきた芸術作品ははげしく揺さぶられる。この伝統の震撼は、人類の現代の危機および刷新と表裏をなすものである。この二つの過程は、今日の大衆運動ときわめて密接に関連している。(ベンヤミン『複製技術時代の芸術作品』より)

従来の芸術作品は「いま、ここ」に一回かぎり存在するものであり、そのオリジナルは真正性をもつ。それに対して、映画や写真などの複製技術は、芸術作品を「いま、ここ」から切り離し、オリジナルのもつ真正性を揺るがす。これをベンヤミンは「アウラの喪失」とよんでいる。ベンヤミンは、こうした複製技術時代の芸術作品と、それらを批評する作業に積極的な可能性を見た。同時に、ファシズム政権が複製技術を巧みに利用し、政治的プロパガンダに利用することに懸念を表明している。

[次ページへつづく]



## 無知のヴェール

公正としての正義において、平等な原初状態は、伝統的な社会契約説けいやくにおける自然状態に対応するものである。この原初状態は、もちろん、実際の歴史上の事態として考えられたものでも、ましてや文化の原始的状態として考えられたものでもない。それは、正義についての特定の考えを導き出すように特徴づけられた、純粹じゅんすいに仮説的な状況として理解される。この状況の本質的な特徴の中には、だれ一人として社会における自分の境遇きょうぐうや階級上の位置づけ、社会的地位を知らないということや、生まれもつ資産や能力、知性、体力などの分配に関する自分の運・不運を知らないということがある。さらに、当事者たちは善よさについての考えももちあわせておらず、自身に特有の心理的な性向も知らないと仮定しよう。正義の諸原理は無知のヴェールにおおわれた状態で選択されるのである。これによって、諸原理を選択するにあたり、自然本性的な偶然性ぐうぜんや社会的環境の偶発性により結果としてだれかが有利になったり不利になったりしない、ということが確保される。全員が同じ環境におかれており、個人特有の事情にあわせて諸原理を立案することはだれにもできないから、正義の諸原理は公正な合意または交渉の結果ということになる。(ロールズ『正義論』より)

ロールズは、ロックやルソーの社会契約説を応用して、公正な初期状態(原初状態)におかれた人々が必ず合意し受け入れるような正義の諸原理を追究し、その手続きを「公正としての正義」とよんだ。

[次ページへつづく]

vol.

11

## 思考問題セレクション 倫理

問題編

→教科書 p.140

生徒X・Yが、社会や国家のあるべき姿に関するいくつかの考え方についてまとめ、話し合っている。次の会話文中の空欄  ~  に当てはまる最も適切な語句を、 については後の①~③のうちから、・ については後の①・②のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

X：社会や国家のあるべき姿については、様々な考え方があるのだね。教科書を参考に、そのいくつかをまとめてみたよ。

**考え方1** 基本的な自由の権利は各人に平等に保障されなければならない。そして、社会的・経済的な格差は、それが公正な競争によって生じ、かつ、最も恵まれない人々の生活の改善につながる場合に限り認められる。

**考え方2** 人間は様々な共同体と密接に関わっており、その成員の間で広く共有されている価値観を内面化している。そのため、それぞれの共同体が育んできた複数の徳が継承され、成員が友愛や責務を積極的に担うような社会が望ましい。

**考え方3** 個人の自由は最大限尊重されるべきものである。個人が才能や労働の成果として獲得したものは、その人の所有物であり、その人がもつ所有物への権限を侵害することは許されるべきではない。

Y：**考え方1** は、 が説いていたものだね。

X：**考え方2** の立場からすると、**考え方1** は  見なしているとして、批判することになるのかな。

Y：そうだね。そして、**考え方3** の立場だと、強制的な課税によって富を再分配する政策には  だということになるのだね。

① ロールズ      ② ノージック      ③ サンドル

① 共同体から切り離された自由で独立した個人というものは存在しないと  
② 道徳や正義が共同体を離れて成立するものであるかのように

① 賛成      ② 反対

ホームへ

## 書名入る

第1編第4章 国際社会に生きる日本人としての自覚

1節 日本の精神風土

2節 仏教と日本の思想形成

3節 儒教と日本の思想形成

4節 国学の思想

5節 庶民の思想

6節 西洋思想と日本の近代化

7節 現代日本における生き方の自覚

読み上げ音声 (第1編第4章) →別紙 3-1

154ページ 読み上げ音声43 (p.154~156) →別紙 3-1

154ページ デジタル原典資料 (第1編第4章1節1) →別紙 20-1

157ページ 読み上げ音声44 (p.157~158) →別紙 3-1

159ページ 読み上げ音声45 (p.159~160) →別紙 3-1

159ページ デジタル原典資料 (第1編第4章1節3) →別紙 20-2

書名入る > 第1編第4章 国際社会に生きる日本人としての自覚



## 風土とは

風土の現象について最もしばしば<sup>おこ</sup>行なわれている誤解は、我々が最初に提示したごとき常識的な立場、すなわち自然環境と人間との間に影響を考<sup>おこ</sup>える立場であるが、それはすでに具体的な風土の現象から人間存在あるいは歴史の契機<sup>けいき</sup>を洗い去り、それを単なる自然環境として観照する立場に移しているのである。人間は単に風土に規定されるのみでない。逆に人間が風土に働きかけてそれを変化<sup>おこ</sup>する、などと説かれるのは、皆<sup>みな</sup>この立場にほかならない。それはまだ真に風土の現象を見ていないのである。我々はそれに対して風土の現象がいかに人間の自己了解の仕方であるかを見て来た。人間の、すなわち個人的・社会的なる二重性格を持つ人間の、自己了解の運動は、同時に歴史的である。従って歴史と離れた風土もなければ風土と離れた歴史もない。が、これらのことは人間存在の根本構造からしてのみ明らかにされ得るのである。

(和辻哲郎『風土』より)

風土とは、人間存在と対置されるような客観的なものではなく、また、それによって人間のあり方が一方的に規定される自然環境のことでもない。和辻によれば、風土とは、人間と自然とのあいだで歴史的に形成されてきた「人間の自己了解の仕方」なのである。



## デジタル原典資料

第1編 | 第4章 | 1節 3 日本における倫理観

→教科書 p.159

## 清き明き心

(母であるイザナミノミコトのいる根之堅州国に行きたいと泣いてばかりで、まかさ  
れた海原の統治をまったくせず、イザナギノミコトによって追放された)スサノヲノミ  
コトが、「それでは、アマテラスオオミカミにことのしだいをお話ししてから根之堅州  
国へ参ろう」とおっしゃって、天へ参りのぼられたとき、山や川はみな揺れ動き、国土  
はみな震えた。アマテラスオオミカミはこれを聞いて驚き、「私の弟がのぼってくるのは、  
きっと善い心によるのではない。私の国を奪おうと思つてのことに違いない」とおっ  
しゃり、……スサノヲノミコトを待ち受けて、「なぜのぼってきたのか」と問われた。  
そこでスサノヲノミコトは、「私には邪しき心はありません。ただ、イザナギノミコト  
の仰せで、私が泣きわめく理由をお尋ねになるので、『私は母の国に行きたいと思つて、  
泣きわめいているのです』と申しました。すると、イザナギノミコトは『おまえはこの  
国にいてはならない』と仰せになり、私を追放なさいました。ですので、母の国に行く  
ことになったしだいを申しあげようと参上したまでです。邪心はないのです」と答え申  
しあげた。これを聞いたアマテラスオオミカミは、「それならば、おまえの心が清く明  
いことは、どうしたらわかるであろうか」と仰せになった。スサノヲノミコトはこれに  
答えて、「それぞれに誓約をして、子を生むことにしましょう」と申した。(『古事記』より)

スサノヲノミコトが姉にあたるアマテラスオオミカミの治める高天原にのぼったところ、アマテラスオオミカミは自  
分の国を奪いにきたのではないかと警戒し、「おまえの心が清く明いこと」を証明するよう求めた。清明心の「明」は、  
「赤裸々」というときの「赤」に通じ、透明で隠し立てのない心のありようをあらわしている。

ホームへ

書名入る

第1編第4章 国際社会に生きる日本人としての自覚

1節 日本の精神風土

2節 仏教と日本の思想形成

3節 儒教と日本の思想形成

4節 国学の思想

5節 庶民の思想

6節 西洋思想と日本の近代化

7節 現代日本における生き方の自覚

書名入る > 第1編第4章 国際社会に生きる日本人としての自覚

161ページ 読み上げ音声46 (p.161~164) →別紙 3-1

161ページ デジタル現代語訳 (第1編第4章2節1) →別紙 21-1

161ページ 思考問題セレクション 倫理 vol.12 →別紙 21-2

165ページ 読み上げ音声47 (p.165~169) →別紙 3-1

165ページ デジタル原典資料 (第1編第4章2節2) →別紙 21-3

165ページ デジタル現代語訳 (第1編第4章2節2) →別紙 21-4

170ページ 読み上げ音声48 (p.170~172) →別紙 3-1

170ページ デジタル原典資料 (第1編第4章2節3) →別紙 21-5

170ページ デジタル現代語訳 (第1編第4章2節3) →別紙 21-6



## 1 憲法十七条

第一条、和を貴び、人に逆らわないことを心がけなさい。……

第二条、三宝をあつく敬いなさい。三宝とは、仏と、仏の教え、そしてその仏の教えを学び修する僧侶たちのことである。……

第十条、怒りの心を絶ち、憤りを外に対してあらわすことをやめ、人が自分と違ってそれを怒らないようにしなさい。人はそれぞれ心をもっており、ゆずれない部分がある。相手がよしとすることを、私はまちがっているとし、私がよいとしたことを、相手はまちがっているとすることもある。私は必ずしも聖人ではないし、相手は必ずしも愚か者ではない。両者ともに凡夫なのだ。……

第十七条、独断で物事をおこなってはならない。必ずほかの人たちと適切に論じあうようにしなさい。  
(『日本書紀』より)

## 3 一隅を照らす

国宝とは何であるか。宝とは道を求める心である。道を求める心をもつ人を名づけて、国宝という。それゆえ昔の人は、「直径一寸の玉が十個あることが国宝なのではなく、世の一隅を照らす人が国宝である」と言ったのである。  
(最澄『山家学生式』より)

vol.  
12

## 思考問題セレクション 倫理

問題編

→教科書 p.161

次の図を見た高校生Wは、感じた疑問や、その疑問についてW自身が調べた結果を、後のノートに書き留めた。ノート中の  ~  に当てはまる記述や語句の組合せとして最も適当なものを、後の①~⑧のうちから一つ選べ。

図



ノート

・この図は「曼荼羅」と呼ばれるもので、 描いている点に特徴がある。

## 感じた疑問

- (i) 曼荼羅という語句には、どのような意味があるのか。
- (ii) 中心に配置されている仏は、何者なのか。



## デジタル原典資料

第1編 | 第4章 | 2節 | 2 仏教の日本的展開

→教科書 p.165

## 専修念仏

唐土我が朝に、諸々の智者達の沙汰し申さるゝ、観念の念にも非ず。又学文をして念の心を悟りて申念仏にも非ず。たゞ往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申て、疑なく往生するぞと思とりて、申外には別の子細候はず。但三心四修と申事の候は、皆決定して南無阿弥陀仏にて往生するぞと思ふ内に籠り候也。此外に奥深き事を存ぜば、二尊のあはれみに外れ、本願に漏れ候べし。念仏を信ぜん人は、たとひ一代の法を能々学すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智の輩に同うして、智者のふるまいをせずして、只一向に念仏すべし。

〔現代語訳〕(念仏は)中国やわが国で多くの智者たちが論じていらっしやるような観念の念ではない。また、学問をして念の道理を悟って申すような念仏でもない。ただ、「極楽往生のためには、南無阿弥陀仏と申して疑いなく往生するのだ」と思いとって、念仏を申す以外のことはないのである。ただし、三心(極楽往生を得るのに必要とされる3種の心：至誠心・深心・廻向発願心)・四修(念仏実践に必要なとされる4種の態度や方法：恭敬修・無余修・無間修・長時修)というものはあるが、これらはみな、必ず南無阿弥陀仏と唱えて往生するのだと思う内にこもっているのである。このほかに奥深いことがあると考えると、阿弥陀仏と釈尊(ブツダ)のおあわれみに外れることになり、本願からもれてしまうことになるだろう。念仏を信じる人は、たとえ釈尊が一生のあいだにお教えになったことをよくよく学んだとしても、一文字すら知らない愚鈍な身となり、尼入道(在家のまま髪を剃って仏門にはいった女性。愚かで無知な道心者の意)のような無知なともがらと同じようになって、智者のようなふるまいをやめ、ただひたすらに念仏するべきである。  
(『一枚起請文』より)

『一枚起請文』は、法然が亡くなる前に弟子の求めに応じて著したと伝えられる、念仏の教えの要点をまとめたことばである。極楽往生に必要なのは、難解な理論や、道理をよく理解した上でおこなう念仏でもない。何もわからないままにひたすら「南無阿弥陀仏」を唱えるという、どれだけ愚かな人でも実践できる念仏の易行こそが必要であると、法然は説いている。

[次ページへつづく]



## 2 悪人正機説

善人でさえ往生おうじょうできる。まして悪人はいうまでもない。しかし、世の人々はいつも「悪人でさえ往生できる。まして善人はいうまでもない」と言う。この点は、一応理由があるように見えるけれども、絶対他力たうりきである阿弥陀仏あみだぶつの本願ほんのうにすべてをまかせるといふ教えの趣旨ほんのうにそむいている。……煩惱ぼんのうにまみれた私たちは、どのような修行しゆぎやうをしても生死しんじの迷いを離れることができないのを阿弥陀仏あみだぶつがあわれに思ってください、(そのような悪人を救おうという)願ねがひをお立てになった本来のお望みは、悪人を成仏じやうぶつさせるためなのであるから、阿弥陀仏あみだぶつの他力たうりきをお頼り申しあげる悪人こそが、往生おうじょうにふさわしいのである。このことによって、「善人でさえ往生できる。まして悪人はいうまでもない」とおっしゃったのである。  
(唯円『歎異抄』より)

## 3 自然法爾

阿弥陀仏あみだぶつの御誓おんちかいは、もとより行者自身ぎやうじやのはからいではなく、「南無阿弥陀仏なむあみだぶつ」と頼らせるようになさって、浄土じやうどにむかえようとおはからいになるのだから、行者ぎやうじやがよいとも悪いとも思いはからわないのを「自然」と申すと聞いております。(親鸞しんらん『消息集』より)

## 5 只管打坐

道を学ぶ上で最も重要なのは、坐禅ざぜんである。宋そうの人が、多く悟りさとを得ることができているのは、すべて坐禅ざぜんの力である。一字も読み書きできない、学才もなく愚かな鈍根どんこんの者でも、坐禅ざぜんに専念せんねんすれば、長い年月参学さんがくした聡明そうめいな人にも勝って完成まきするのである。したがって、悟りの道を学ぼうとする者は、ひたすら坐禅ざぜんをして、ほかのことにはかかわらないようにしなさい。仏の道は、ただ坐禅ざぜんするのみである。ほかのことにはかかわらない。  
(懷奘えいじやう『正法眼蔵随聞記』より)

[次ページへつづく]



## デジタル原典資料

第1編 | 第4章 | 2節 | 3 仏教と日本文化

→教科書 p.170

## 秘すれば花

たとへば、弓矢の道の<sup>てだて</sup>手立にも、名将の<sup>あん</sup>案・<sup>はか</sup>計らいにて、<sup>ほか</sup>思いの外なる手立に(て)、強敵にも勝つことあり。これ、<sup>かた</sup>負くる方(のため)には、めづらしき<sup>ことわり</sup>理に化かされて破らるるにてはあらずや。これ、一さいの<sup>し</sup>事、<sup>お</sup>諸道芸に於いて、勝負に勝つ理なり。かやうの手立も、<sup>ことらつきよ</sup>事落居して、かゝる<sup>のち</sup>計り事よと知りぬれば、その後はたやすけれども、いまだ知らざりつる<sup>ひじ</sup>ゆゑに負くるなり。さるほどに、<sup>い</sup>秘事とて、一つをば我が<sup>いえ</sup>家に残すなり。

こゝを以て知るべし。たとへあらはさずとも、かゝる<sup>もつ</sup>秘事を知れる人よとも、人には知られまじきなり。人に心を知られぬれば、<sup>かたき</sup>敵人油断せずして用心を持てば、かゝる<sup>てきほう</sup>敵に心をつくる相なり。敵方用心をせぬ時は、こなたの勝つこと、なほたやすかるべし。人に油断をさせて勝つことを得るは、めづらしき<sup>たいよう</sup>理の大用なるにてはあらずや。さるほどに、我が家の<sup>しやうがい</sup>秘事とて、人に知らせぬを以て、生涯の主になる花とす。秘すれば花、秘せねば花なるべからず。

**〔現代語訳〕**例えば、武道の戦術においても、名将が立てる作戦・計画によって、意表をついた戦法で強敵に勝つことがある。これは負けた側にとっては、めづらしさの理によってあざむかれて負けてしまったということになるだろう。これが、あらゆること、さまざまな芸道において、勝負に勝つための理である。このような計略も、一件落着して、こういうはかりごとだったのだとわかれば、その後はたいしたこともないけれども、まだ知らなかったために負けたのである。このようなわけで、秘伝として、この教え一つをわが家に残しておく。

以上のことから、秘事を明らかにしなくても、それだけではじゅうぶんでなく、このような秘密のやり方を知っている人間であることも人に知られてはならないということがわかるであろう。人に<sup>ひん</sup>魂胆を知られば、敵は油断せず用心するので、かえって敵に心構えをさせる結果になる。敵方が用心をしないときは、こちらが勝つのもさらにたやすくなるであろう。人に油断をさせて勝つのが、めづらしさの理の大きな効用ではないだろうか。以上の理由で、わが家の秘事が秘事であることを人に知らせないことが、生涯にわたって花の主になる手立てとなる。秘すればこそ花となり、秘さなかったなら花にはならないのである。  
(世阿弥『風姿花伝』より)

世阿弥は「花と、<sup>ひら</sup>面白きと、<sup>めづ</sup>珍しきと、これ三つは同じ心なり」と述べており、さらにここでは、花は秘してこそ花になると、それを秘伝にする本意を説明している。



## 1 日本の無常観

川はかれることなくいつも流れているが、そこに流れている水はもとの水ではない。よどんだところに浮かぶ水の泡も、あちらで消えたかと思うとこちらにできていたりして、いつまでもそのままではない。世の中の人とその住まいも、やはりこのようである。……そこに住む人と住まいとが、無常を争うかのように消えていくさまは、朝顔とそこについた露と同じである。露だけが落ちて、朝顔の花だけが残ることもあるだろう。しかし、残るとはいつても、朝日が昇れば枯れるのである。

(鴨長明『方丈記』より)

あだし野の露が消えることがなく、また鳥部山の煙が立ち去ることなく、そのように人が死ぬことなく生きつづけるとすれば、どうしてもものあわれなどという感情が生まれようか。世の中は無常であるからこそよいのだ。

(兼好法師『徒然草』より)

ホームへ

書名入る

< 第1編第4章 国際社会に生きる日本人としての自覚 >

173ページ 読み上げ音声49 (p.173~175) →別紙 3-1

173ページ デジタル原典資料 (第1編第4章3節1) →別紙 22-1

173ページ デジタル現代語訳 (第1編第4章3節1) →別紙 22-2

176ページ 読み上げ音声50 (p.176~178) →別紙 3-1

176ページ デジタル原典資料 (第1編第4章3節2) →別紙 22-3

176ページ デジタル現代語訳 (第1編第4章3節2) →別紙 22-4

1節 日本の精神風土 >

2節 仏教と日本の思想形成 >

3節 儒教と日本の思想形成

4節 国学の思想 >

5節 庶民の思想 >

6節 西洋思想と日本の近代化 >

7節 現代日本における生き方の自覚 >

書名入る > 第1編第4章 国際社会に生きる日本人としての自覚



## デジタル原典資料

第1編 | 第4章 | 3節 | 1 儒教の受容

→教科書 p.173

## 存心持敬

礼と云は、根本は心に敬を云ぞ。心に敬によりて、万事について、躰と云ものがあるぞ。躰と云も、兎角人をさきだて、己をのちにするが躰也、礼也。論語に、「礼と云ひ、礼と云ふ。玉帛をしも云や乎哉」と云は、礼は敬ふが本であるぞ。あながちに御礼にまいるときに、玉や帛や或は金銀のつれを持ちてゆくを、礼とは云ふまひぞ。それは心に敬ふと云のしるしに、玉帛・金銀を持ちてゆくぞ。また玉帛・金銀等、それぞれに応じて土産を持ちてゆかぬも、むかひを軽しむるになるほどに、さもなふては敬の心があらはれぬぞ。しかれども、まづ礼はうやまふが本であるぞ。

〔現代語訳〕礼とは、根本においては、心に敬があることをいう。心に敬があることから、あらゆることにしつけというものがある。しつけとは、何につけても人を先にして、自分をあとにすることであり、礼である。『論語』に、「礼といい、礼という。玉帛をいうのか(礼だ礼だというが、それは儀礼で用いる玉や絹織物のことであろうか)」というのは、礼とは敬がもとであるということをいっているのである。御礼に参るときに、やたらに玉や絹や金銀の貨幣をもっていくのを礼とはいわないであろう。心に敬っていることのしるしとして、玉や絹や金銀をもっていくのである。また、それぞれの場合にに応じて玉や絹や金銀などの土産をもっていかないというのも、相手を軽んじているようになってしまうので、それでは敬の心が外にあらわれないことになってしまう。けれど、まずは敬うということが根本になければならない。  
(林羅山『春鑑抄』より)

羅山は礼秩序を重視したが、礼とは例えば御礼の品をもっていくというようなことではなく、心に敬をもって相手に接することである。敬を表にあらわす際に規範となるのが礼であり、しつけであるという。



## デジタル現代語訳

第1編 | 第4章 | 3節 1 儒教の受容

→教科書 p.173

**3** 上下定分の理

天が上にあり、地が下にあるというのは、天地の礼(規範)である。この天地の礼は人の心に生まれつき備わっているものなので、すべてのことについて、上下・前後の順序というものがある。この心を天地におし広めていけば、君臣・上下といったあらゆる人間関係はみだれないのである。  
(林羅山『三徳抄』より)



## デジタル原典資料

第1編 | 第4章 | 3節 | 2 儒教の日本的展開

→教科書 p.176

## 愛敬

孝徳の感通をてぢかくなづけていへば、愛敬の二字につまれり。愛はねんごろにしたしむ意なり。敬は上をうやまひ、下をかるしめあなどらざる義也。孝はたとへば明なる鏡のごとし。むかふものゝ形と色によつて、かゝみのうちの影はしななじなかはれども、あきらかにうつす鏡の体はおなじもの也。そのごとく父子君臣の人倫にあひまじはる事は、千々よろづにしなかはれども、愛敬の至徳は通ぜざるところなし。

(現代語訳) 孝徳が通じるところを簡単にいいあらわせば、愛敬の二文字に要約できる。愛とはねんごろに親しむという意味であり、敬とは上のものを敬い、下のものを軽んじ侮ることがないという意味である。孝をたとえば、明らかな鏡のようなものである。鏡に映るものの形と色によって、鏡に映る姿はいろいろ変わるけれども、それを明らかに映す鏡自体は同じものである。そのように、父子・君臣などの人倫への交わり方はさまざまで、あれこれ変わるけれども、愛敬という最上の徳は通じないところがない。  
(中江藤樹『翁問答』より)

藤樹は、孝をすべての人間関係、そして天地をつらぬく根本原理ととらえた。さらに、孝は愛敬の二字に要約でき、とき・ところ・位に応じて実践すべきであると説く。

## 仁愛

慈愛の心、渾淪通徹、内より外に及び、至ずといふ所無く、達せずといふ所無ふして、一毫残忍刻薄の心無き、正に之を仁と謂ふ。此に存して彼れに行はれざるは、仁に非ず。一人に施して、十人に及ばざるは、仁に非ず。瞬息に存し、夢寐に通じ、心愛を離れず、愛心に全く、打て一片と成る、正に是れ仁。

(現代語訳) 慈愛の心がすべてのものに行き渡り、自身の内から外におよんで、いたらないところ、達しないところがなく、残忍で薄情な心が少しもないという、このようなことこそを仁という。こちらでは慈愛を実践しながらあちらでは実践しないというのは、仁ではない。一人にだけ慈愛を施して、十人にはおよばないというのでは、仁ではない。ほんの一瞬の時間にもあり、夢を見ているあいだも働き、心が愛を離れることなく、愛が心に備わり、心と愛が一つとなることこそが、まさに仁なのである。  
(伊藤仁斎『童子問』より)

『論語』『孟子』に立ちもどるべきことを説いた仁斎は、人倫日用の道の根本にある仁・愛こそが重要であり、それを誠をもって実践すべきことを説いた。



## 1 孝

このように孝は広大無辺の最高の徳であるので、すべてのものごとの内に孝の道理が備わらないものはない。なかでも人は天地の徳であり万物の靈(あらゆるものの中で最もすぐれたもの)であるがゆえに、人の心と身には孝の実体がすべて備わっているのであるから、それによって身を立て道をおこなうことを修養の要点とする。身を離れて孝はなく、孝を離れて身はないので、身を立てて道をおこなうことが孝行の最も大事な点である。

(中江藤樹『翁問答』より)

## 3 誠

誠とは道の全体である。ゆえに、聖人の学は必ず誠をおもととする。そしてそのさまざまなことばはみな、人に誠をつくさせる理由となっていないものはない。いわゆる仁・義・礼・智、いわゆる孝・悌・忠・信はみな誠をもととする。よって、誠でないと仁は仁ではなく、義は義ではなく、礼は礼ではなく、智は智ではなく、孝・悌・忠・信もまた孝・悌・忠・信であることはできない。ゆえに、「誠でなければものはない」(『中庸』)というのである。

(伊藤仁斎『語孟字義』より)

## 4 士道

およそ士の職というものは、その身をかえりみて、主人を得て奉公の忠をつくし、仲間に交わって信を厚くし、一人でいるときにも身をつつしんで、義をもっぱらとすることにある。そして、自身には、父子・きょうだい・夫婦といった避けられない交わりがある。これもまた、天下のすべての人にそれぞれなければならない人間関係であるとはいっても、農・工・商の三民は仕事の暇がなく、いつもその道をつくすことができるわけではない。士は農・工・商の人々が従事している仕事を差しおいて、この道にもっぱら務め、もしも三民のうちの人倫をみだすような者がいたならば、その人を速やかに罰して、天下で天の道が正しくおこなわれる準備をするのである。これは、士に文武の徳知が備わっていなければできないことである。

(山鹿素行『山鹿語類』より)

[次ページへつづく]

ホームへ

## 書名入る

< 第1編第4章 国際社会に生きる日本人としての自覚 >

179ページ 読み上げ音声51 (p.179~180) →別紙 3-1

179ページ デジタル原典資料 (第1編第4章4節1) →別紙 23-1

179ページ デジタル現代語訳 (第1編第4章4節1) →別紙 23-2

179ページ 思考問題セレクション 倫理 vol.13 →別紙 23-3

1節 日本の精神風土 >

2節 仏教と日本の思想形成 >

3節 儒教と日本の思想形成 >

4節 国学の思想

5節 庶民の思想 >

6節 西洋思想と日本の近代化 >

7節 現代日本における生き方の自覚 >

書名入る > 第1編第4章 国際社会に生きる日本人としての自覚



## デジタル原典資料

第1編 | 第4章 | 4節 | 1 国学の形成と展開

→教科書 p.179

## 高く直き心

いにしへの歌は調をもはらとせり、うたふ物なれば也、そのしらべの大よそは、のどにも、あきらにも、さやにも、遠ぐらにも、おのがじゝ得たるまにまになる物の、つらぬくに高く直き心をもてす。且その高さ中にみやびあり、なほき中に雄々しき心はある也。

〔現代語訳〕古代の和歌は、調子をもつば第一とする。和歌とは声に出して歌うものだからである。その調べのおおよそは、のどかにも、明らかに、はっきりとも、ほの暗くも、各人が思い思いの調子で詠んでもかまわないものであるが、一貫しているのは、高く直き心である。またその高さの中に雅なところがあり、直き中に雄々しき心があるのである。(賀茂真淵『にひまなび』より)

真淵は『万葉集』の歌に高く直き心を見てとり、それを備えた人間像を「ますらをぶり」とよんだ。

## 漢意の排除

がくもんして道をしらむとならば、まづ漢意をきよくのぞきさるべし、から意の清くのぞこらぬほどは、いかに古書をよみても考へても、古の意はしりがたく、古のころをしらでは、道はしりがたきわざになむ有ける、そもそも道は、もと学問をして知ることにはあらず、生まれながらの真心なるぞ、道には有ける、真心とは、よくもあしくも、うまれつきたるまゝの心をいふ、然るに後の世の人は、おしなべてかの漢意のみうつりて、真心をばうしなひはてたれば、今は学問せざれば、道をえしらざるにこそあれ、……

〔現代語訳〕学問をして道を知ろうとするならば、まずは漢意をきれいにとり去るべきである。漢意がきれいにとりのぞかれないうちは、いかに古い本を読んで考えたとしても、古代の精神を知ることが難しく、古代の心を知らなくては、道は知りたいものである。そもそも道というのは、本来、学問をして知るとは異なるものではない。生まれながらの真心というものが道にはあるのであって、真心というのは、よくも悪くも生まれつきたままの心のことをいうのである。それにもかかわらず、後世の人は、ことごとく漢意にばかり影響され、真心を失い切ってしまったので、いまは学問をしなれば、道を知ることができなくなってしまっているのである。(本居宣長『玉勝間』より)

宣長は、儒教や仏教のように理屈でものを考える漢意を排除し、真心に立ち返るべきことを説く。情欲に動かされない漢意に対し、真心はまわりに影響されて動くものであり、だからこそ歌も詠まれるのである。



### 3 「もののあはれ」を知る

もののあはれを知るとはどういうことかという、まず「あはれ」というのはもともと、見るもの聞くもの触れること<sup>ふ</sup>に心の感じて出る嘆息<sup>たんそく</sup>の声で、いまの世のことばにも「ああ」といい、「はれ」というのがそれである。例えば月や花を見て、「ああ、見事な花だ」「はれ、よい月かな」といって感心する。「あはれ」というのは、この「ああ」と「はれ」のかさなったもので、漢文に「嗚呼<sup>ああ</sup>」とある文字を「ああ」と読むのもこれである。……人は、何であれ、感ずべきことに会って感ずべき心を知って感ずるのを、「もののあはれを知る」というのであり、当然感ずべきことに触れても心動かず、感ずることのないのを「もののあはれを知らない」といい、また心なき人と称するのである。……

もとおりのりなが げん じものがりたま おぐし  
(本居宣長『源氏物語玉の小櫛』より)

vol.

13

## 思考問題セクション 倫理

問題編

→教科書 p.179

生徒たちが、日本の思想家の考え方について話し合い、思想家の考え方を身近な事例を通じて説明しようとしている。次の発言ア～エについて、伊藤仁斎が説いた「誠」の考え方に即してなされたものと、本居宣長が説いた「真心」の考え方に即してなされたものの組合せとして最も適当なものを、後の①～④のうちから一つ選べ。

**ア** 例えば、目上の人には常に敬意を示すような態度で接するべきであるように、人間関係では立場の違いをきちんとわきまえて行動することが大切じゃないかな。道徳的な厳格さを伴った行動を、いついかなるときも忘れてはならないと思うんだ。

**イ** 日常的な人間関係の中で、互いが親しみ愛し合うことが何よりも大切なんじゃないかな。そのためには、人々が互いに相手を思いやるとともに、偽りを排除した私心のない純粋な心情を重んじるべきではないかと思うんだ。

**ウ** 感情的になることを嫌い、理性で感情を抑えるべきだという人がいるけれども、感情あってこそ人間じゃないかな。嬉しいときには素直に喜び、悲しいときには素直に泣く、そういうあり方のほうが本来の人間性に即しているのではないかと思うんだ。

**エ** 所有物を失いたくないとか死ぬのは嫌だとか思うかもしれないけれど、それは避けられないことだよ。永遠なるものに固執する心こそが人生における苦の原因だと思うから、永遠なるものはないという真理を悟ることを目指すべきだと思うんだ。

- ① 伊藤仁斎が説いた「誠」－ア      本居宣長が説いた「真心」－ウ
- ② 伊藤仁斎が説いた「誠」－ア      本居宣長が説いた「真心」－エ
- ③ 伊藤仁斎が説いた「誠」－イ      本居宣長が説いた「真心」－ウ
- ④ 伊藤仁斎が説いた「誠」－イ      本居宣長が説いた「真心」－エ

ホームへ

## 書名入る

< 第1編第4章 国際社会に生きる日本人としての自覚 >

1節 日本の精神風土 >

2節 仏教と日本の思想形成 >

3節 儒教と日本の思想形成 >

4節 国学の思想 >

5節 庶民の思想

6節 西洋思想と日本の近代化 >

7節 現代日本における生き方の自覚 >

181ページ 読み上げ音声52 (p.181~183) →別紙 3-1

181ページ デジタル原典資料 (第1編第4章5節1) →別紙 24-1

181ページ デジタル現代語訳 (第1編第4章5節1) →別紙 24-2

184ページ 読み上げ音声53 (p.184~185) →別紙 3-1

184ページ デジタル現代語訳 (第1編第4章5節2) →別紙 24-3

書名入る > 第1編第4章 国際社会に生きる日本人としての自覚



## デジタル原典資料

第1編 | 第4章 | 5節 | 1 庶民の思想の広がり

→教科書 p.181

## 正直と儉約

故に士農工商をのの職分異なるれども、一理を会得するゆへ、士の道をいへば農工商に通ひ、農工商の道をいへば士に通ふ。なんぞ四民の儉約を別々に説べきや。儉約をいふは他の儀にあらず、生れながらの正直にかへし度為なり。天より生民を降すなれば、万民はことごとく天の子なり。故に人は一箇の小天地なり。小天地ゆへ本私欲なきもの也。このゆへに我物は我物、人の物は人の物。貸たる物はうけとり、借たる物は返し、毛すじほども私なく、ありべかゝりにするは正直なる所也。此正直行はるれば、世間一同に和合し、四海の中皆兄弟のごとし。我願ふ所は、人々こゝに至らしめんため也。

(現代語訳)なので、士農工商はそれぞれ職分は異なるが、その職分を通して同じ一つの理を会得するのであって、士の道は農・工・商の道に通じ、農・工・商の道は士の道に通じるのである。どうして士農工商それぞれの儉約を別々に説く必要があるのか。私が儉約のことをいうのは、ほかでもない、生まれながらの正直に立ちもどってほしいからである。天から地上に下されたのが人間であるならば、あらゆる人はみな天の子である。それゆえ、人間自身が一つの小さな天地世界(小天地)である。小天地であるがゆえに、もともと人間には私欲というものはない。そのため、自分のものは自分のもの、人のものは人のもの、貸したものは受けとり、借りたものは返し、ほんの少しも私心をもたず、あるべきようにするのが正直である。この正直がおこなわれれば、世間すべてが和合し、世界中がみなきょうだいのように親しみあう、このような状況にまで人々がいたるやうにと、私は願っているのである。

(石田梅岩『齊家論』より)

万物・万人がすべて「天の一物」とであると説く梅岩は、人々は士農工商に応じて職分が異なっているけれども、みな「一理」の会得のためにそれをおこなっているとのべる。「天の一物」として私欲なしにおこなう商いが、「正直」な商いなのである。

[次ページへつづく]



#### 4 商人の道

ものを売って利益を得るのは商人の道である。……商人が商売で得る利益は、士の俸禄と同じである。商売で利益がなければ、士が俸禄がないのにつかえるようなものである。  
（石田梅岩『都鄙問答』より）

#### 5 万人直耕

自然の人はみずから直接田畑を耕し、直接衣服を織るのであって、原野・田畑に住む人は穀物をつくり、山里の人は材木や薪をつくり、海浜に住む人はさまざまな魚をとり、それぞれの材木や薪、魚や塩、米などの穀物をたがいに交易することで、それぞれの地域に住む人々がともにみな、薪・飯・おかずなどに不自由することなく、安心して食べ、衣服を得ることができるのである。直耕の日々の営みは、欲がなく、上下がなく、尊賤がなく、貧富がなく、聖愚がなく、盗みや刑罰がなく、むさぼりや知識、説法、争乱、くつろぎ、苦楽、色情、軍戦もなく、無事で平安の世である。  
（安藤昌益『統道真伝』より）

#### 6 人道とは水車のようなもの

「人道」とは、たとえば水車のようなものである。その半分は水流にしたがい、半分は水流に逆らうことで回転する。丸ごと水中にはいれば回らないで流されてしまうし、かといって水を離れば回ることはない。……水車の中庸は、適度に水中にはいり、半分は水にしたがい、半分は流水に逆らうことで、運転は滞らなくなる。「人道」もそのように、「天道」の理にしたがって種をまき、「天道」の理に逆らって草をとり、欲にしたがって家業にはげみ、欲を制して義務を思うべきである。  
（『二宮翁夜話』より）



## 2 和魂洋才

君子には五つの楽しみがある。富や地位・名誉めいよはそれとは関係がない。一族の者が礼儀を知り、親族のあいだに不和がないことは、第一の楽しみである。……西洋人が合理的学問を形成したあとに生まれ、古代の孔子や孟子などの聖人や賢人がまったく知らなかった理ことわりを知るのは、第四の楽しみである。東洋の道徳、西洋の技術を小さいことから大きいことまで余すことなくすみずみまで兼ね備えて、それを人々の役に立てて国の恩に報むくいることは、第五の楽しみである。  
(佐久間象山『省魯録』より)

(古代中国の理想的な王とされる)堯ぎょうや舜しゆんが実践し、そして孔子が説いた「道」を明らかにし、西洋の技術をつくすならば、国が富むだけにとどまらず、また、兵が強くなるにとどまらず、人として踏みおこなうべき大事な道を、世界中に広めることができるであろう。  
(横井小楠「佐平太・太平二甥の洋行に際して」より)

ホームへ

書名入る

第1編第4章 国際社会に生きる日本人としての自覚

1節 日本の精神風土 >

2節 仏教と日本の思想形成 >

3節 儒教と日本の思想形成 >

4節 国学の思想 >

5節 庶民の思想 >

6節 西洋思想と日本の近代化

7節 現代日本における生き方の自覚 >

書名入る > 第1編第4章 国際社会に生きる日本人としての自覚

187ページ 読み上げ音声54 (p.187~189) →別紙 3-1

187ページ デジタル原典資料 (第1編第4章6節1) →別紙 25-1

190ページ 読み上げ音声55 (p.190~191) →別紙 3-1

190ページ デジタル原典資料 (第1編第4章6節2) →別紙 25-2

192ページ 読み上げ音声56 (p.192~193) →別紙 3-1

192ページ デジタル原典資料 (第1編第4章6節3) →別紙 25-3

194ページ 読み上げ音声57 (p.194~197) →別紙 3-1

194ページ デジタル原典資料 (第1編第4章6節4) →別紙 25-4

198ページ 読み上げ音声58 (p.198~201) →別紙 3-1

198ページ デジタル原典資料 (第1編第4章6節5) →別紙 25-5